

# 伝統と創造

## 野外舞台芸術で新たな大阪ブランドを

世界で各都市がその魅力を競う中で、いま都市の文化力が問われている。劇場や博物館、美術館が充実していることは、もとより重要である。それに加えて、その都市固有の歴史的な文化資産を活用して芸術的空間を創造することが大きな魅力になる。大阪城を舞台に関西の優れたアーティストの発表の場を設ける「大阪城サマーフェスティバル」は、毎年70万人が訪れるイベントとして定着してきた。その出演者と実行委員が集まり、野外舞台芸術の可能性を話し合った。

出席

松本薫平氏

(オペラ歌手)

内藤里美氏

(オペラ歌手)

當麻佳成氏

大阪城サマーフェスティバル実行委員会メンバー  
毎日放送 経営戦略室 シニアアドバイザー

佐々木洋三

大阪城サマーフェスティバル実行委員会事務局長

司会進行

堀井良殷

関西・大阪21世紀協会理事長





松本薫平氏



内藤里美氏

### 水上オペラの可能性

**堀井** 都市空間の劇場化は、関西・大阪21世紀協会が永年取り組んできた課題です。ただ賑やかに人目を引くだけのイベントをするのではなく、市民の創造的活動の発表の場として蓄積され、地域の文化力の底上げに貢献するプログラムとして実施することが重要だと考えてきました。アーティストが劇場での公演だけでなく、野外に飛び出して観客の層を広げることで大きなインパクトが生まれます。これまで、大阪城の西の丸庭園や大手門前、そして大阪城ホール側の川を舞台に非日常的な創造的空間をつくる試みを積み重ねて

きましたが、そのまとめ役をしている佐々木さんから話してください。

**佐々木** 大阪城サマーフェスティバルは、コンサートや演劇、伝統芸能公演、グルメイベントなどの各主催者が連携し、大阪城公園を中心に波動的に展開する大コラボレーションイベントです。「大阪城」の知名度と各主催団体が連携するスケールメリットを利用して、単独開催と比べて宣伝の費用対効果を高めたり、賑わいの相乗効果を生み出そうというものです。2006年に大阪21世紀協会(当時)の働きかけで大阪府や大阪市、在阪の放送局やホールなどで実行委員会をつくり、第1回を開催しました。昨年は第9回を迎え、大阪の夏の風物詩として定着しつつあります。とくに2012年度は、大手門広場を使ってオペラやダンスを披露する「オープニング・ガラ」や、西の丸庭園の特設ステージで夕暮れの大阪城天守閣をバックに高校吹奏楽部の競演などを協会主催で行ないました。とても好評で毎年続けてほしいという要望が多かったのですが、2013年度からは西の丸庭園がモトクロスレス会場になり、中断を余儀なくされています。高校吹奏楽を指揮・監修された藤岡幸夫さん(関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者)は、「世界各地でタクトを振ったが、大阪城をバックに演奏できる西の丸庭園は、ここにおいて他にはない。胸をはって誇れる場所なのに、大阪はどうしてもっと有効活用しないのか」と言っておられます。

**堀井** 昨年、協会は、大阪城天守閣を望む第二寝屋川で「水上オペラ」を開催しました。これも社会実験のひとつですが、ご出演いただいた松本さん、内藤さんは、どのような感想を持たれましたか。



堀井良殷

**松本** 水上オペラでは企画やキャスティングもさせていただきました。音響や船上での舞台設定など厳しい制約がありましたが、スタッフの方々が見事にクリアしていただきました。また、出演する私たちも、舞台設備や生のオーケストラなどにこだわらず、いろんな場所で、いろんな形のオペラが上演できることを実感しました。

**内藤** 船の上から対岸のお客様に向かって歌ったり、生演奏ではなくカラオケだったり、普段とは場所や方法が異なるので戸惑いもありましたが、実際にやってみてすごく楽しかったです。橋の上や岸边など、自由なスタイルでご覧いただけたのも良かったですね。なにより大阪城が背景というのは、アピール力が大きい。まちを劇場化するのであれば、水上オペラをコアイベントとして、大阪城公園を全部使って音楽や演劇など、さまざまな周辺イベントを展開し、それらをまとめて「水都大阪劇場」にするってというのはどうでしょうか。

**堀井** それは面白いですね。現在の大阪城天守閣は市民の募金で作られたもので、いわば大阪人の心意気の詰まっ



大阪城西の丸ステージウィーク (2012年7月・西の丸庭園特設ステージ)

た場所。その意味で、スコットランドの「エディンバラ・フェスティバル」のように、ここを拠点に大阪の歴史・文化を活かし、新たな創造を加えた賑わいをつくりたいと思っています。當麻さんもエディンバラ・フェスティバルをご覧になられましたね。

### エディンバラ・フェスティバル

**當麻** 私は2013年8月に見に行きました。エディンバラ・フェスティバルは、1947年に始まった「エディンバラ国際フェスティバル」が始まりです。当時は、第二次世界大戦後の暗いムードの払拭や、スコットランドの首都エディンバラの衰退を文化の力で復興しようという思いがあったのでしょう。中心のエディンバラ城はスコットランド人の魂ともいべき場所で、現在は、そこでバクパイブ演奏やダンスが披露される4000人規模の「ミリタリー・タウ(軍楽隊の公演)」が連夜上演され、その開催期間に合わせて世界トップクラスのアーティストを招聘し、市内各所のホールで演劇やオペラ、ダンスパフォーマンスなどが開催されます。さらにそのフリンジ(周辺イベント)として、教会や飲食店などを会場にして、さまざまな自主公演が開催されます。日本人が来て英語落語会やコント劇などもやっていました。「エディンバラ・フェスティバル」というのは、そうした複数の芸術・文化の祭典の総称です。

**佐々木** エディンバラ市は人口約45万人のまちですが、フェスティバルの期間の一夏に200万人もの観光客が訪れるそうです。フリンジがお目当ての人も多く、韓国の「NANTA(台所器具を使うパフォーマンス)」もここで成功を収め、世界的に知られるようになりました。

**當麻** フリンジはエディンバラ国際フェスティバルに便乗して自然発生的に生まれたものですが、ショーケースのような面白



當麻佳成氏



佐々木洋三

さがあります。多くのファンがついているものもあり、その集客力には興行家たちも大きな関心を寄せています。まさに文化の力で、「エディンバラ」というまちの存在感を見せつけているのです。大阪城サマーフェスティバルもそうなればいいですね。



大阪城サマーフェスティバル「オープニング・ガラ」  
(2012年7月・大阪城大手門前広場)

### 出演の機会を増やす

**堀井** 話は戻りますが、水上オペラをご覧いただいた人の感想のなかで、とても嬉しかったものが二つあります。一つは「普段見慣れた場所がこの日に限って別世界のように感じた」というもの。二つ目が、「内藤さんや松本さんのような素晴らしいアーティストが私たちのすぐ近くにいることを知り、一度でファンになった」というものです。私たちは、お二人のような素晴らしいアーティストをもっと多くの人に知っていただきたいと思っています。出演機会が増えれば、若いアーティストの励みにもなります。

**内藤** ありがとうございます。私は神戸市が設立した公益財団法人神戸市演奏協会の混声合唱団に所属しています。この団体は、神戸市に根ざした活動として、各区民センターでのコンサートや無料コンサートを頻繁に開催しています。とくに昼間の公演はいつも満席に近いです。一度ファンになっていただいた方のリピート率はとても高いです。なかには年間パスをお持ちの方も多く、それをステータスのように感じていただいています。

**松本** 関西では今、兵庫県立芸術文化センターやびわ湖ホールがすごく頑張っていて、兵庫県立芸術文化センターはオペラの公演を10日間ぐらい行いますが、平日のマチネ(昼公演)でも完売になるくらいです。こんなことは東京の新国立劇場でもないんじゃないでしょうか。ただ一つ残念なことは、関西のホールであるにもかかわらず、あまり関西の若手が出演できてないことです。素晴らしい才能を持った関西の歌手はたくさんいます。オーディションなどのチャンスをもう少しいただけると、歌手の目標や励みにもなり、関西の音楽界、音楽界が盛り上がっていくと思うのですが。

**堀井** 音楽家の経歴に、どこかのどんな公演に出たかとか、どんなコンクールで受賞したとかが書かれていますが、関西でもそうした箔付けが必要なのでしょうか。

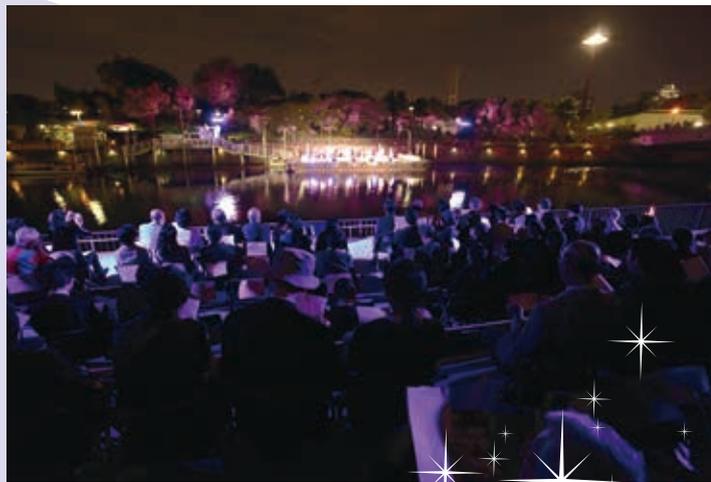
**松本** 経歴にこだわるのは日本人の特徴で、仕方のないことかもしれませんが、外国の人は聴いて良かったらちゃんと評価してくれて「ブラボー」といってくれます。逆に出来が悪いとブーイングされそうですけれどね。国際コンクールで入賞した

## 水上オペラ 大阪城

## ガラ・ナイト

2014年10月4日／大阪水上バス乗り場「大阪城港」周辺  
主催：関西・大阪21世紀協会

「水都の川面に響き渡る美しきアリア」をキャッチフレーズに開催された、大阪城フェスティバル2014のフィナーレともいべき野外オペラ公演。大阪水上バス「大阪城港」船着場がある第二寝屋川に舞台をつくり、大阪城新橋、川面に浮かべた小船なども使って、オペラ「カルメン」の代表的な場面と「ホフマンの舟歌」「Let it go(ありのまま)」などアリア12曲を披露した。出演は松本薫平氏、内藤里美氏、八木寿子氏をはじめ、関西を拠点に活動するオペラ歌手やフラメンコダンサーら8名。音楽監修・指揮に関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者の藤岡幸夫氏を迎え、東海大学附属仰星高等学校吹奏楽部も参加した。大阪城天守閣をバックに、水面に映える色とりどりの照明のなか、迫力のある歌声や華麗な踊りが2時間半にわたって展開され、多くの観衆がその劇的空間に魅せられた。終演後のアンケートでは「本当に感動した」「これが大阪の風景なのか」「これからも続けてほしい」という声が多く寄せられた。



メインステージ遠景

人だから「ブラボー」ではないのです。是非生の音楽を聴きに行き判断してほしいと思います。ただその演奏会を聴きに行くきっかけとして、経歴などプロフィールは必要なのかもしれません。

## 楽しいヨーロッパの都市

**堀井** お二人は海外ではどのようなご経験がございましたか。

**松本** 私はミラノ(イタリア)に住んでいました。夏になると、アレナ・ディ・ヴェローナという古代ローマ時代の屋外闘技場で野外オペラ公演が行なわれ、ドイツやフランスなどからやって来た多くの外国人観光客で賑わいます。夜9時ごろから上演するので、観客はローソクを立ててムードを出したり、ワインやパニーニ(イタリアのサンドイッチ)を食べながら気軽に観ています。ビールの売り子なんか、「一曲歌うから、うまいと思ったら買ってくれ」といってオペラアリアを歌い出すこともあります。彼らはクラシックを勉強しているわけではないんですよ。

**内藤** 私はドイツのエアフルト歌劇場とゲスト契約をしていました。エアフルトではサマーフェスティバルがあり、毎年多くの観光客で賑わいます。本来、夏はコンサートが少ないのですが、このときばかりは歌劇場だけでなく、教会の大聖堂の野外階段を舞台にしてオペラを上演するんです。大聖堂は周りが広場になっていて、ちょうど大阪城西の丸庭園で演奏会をやるような感じになります。ドイツには市に一つずつ市営劇場があり、市と連携した企画も行なわれます。



**堀井** 大阪にオペラ専用劇場はありませんが、大阪城周辺にはクラシック専用のいずみホールをはじめ、NHKホールやフェスティバルホール、ザ・シンフォニーホール、オリックス劇場、シアターBRAVA!などがあります。これらが一年のある期間、一つのテーマで連携して集中的に公演を打てば、大阪もミラノやエアフルトのようにまち全体で盛り上がると思いますね。

## カルチュラルオリンピアド

**佐々木** 2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは、2000万人のインバウンド(観光や商用などで来日する外国人)が見込まれ、大阪でも800万人の集客を目指しています。そして今、「地方創生」の掛け声とともに、地方都市もインバウンドによって国際交流や文化・経済の発展の契機にしようと、国をあげてさまざまな文化プログラム「カルチュラルオリンピアド」が進められつつあります。一方、関西では、東京五



内藤里美氏



松本薫平氏



八木寿子氏



メインステージ前の川に浮かぶ小舟で歌う内藤氏(右)と八木氏(左)



輪と前後して2019年にラグビーワールドカップ、2021年には生涯スポーツの国際大会である関西ワールドマスターズゲームズが予定されており、スポーツツーリズムを通して各地域の文化や魅力を発信し、活性化につなげる重要な時期を迎えます。

**堀井** 大阪の文化力を世界に示す絶好のチャンスですね。関西・大阪21世紀協会もカルチュラルオリンピックに参画し、大阪城フェスティバルなどで培ったネットワーク型のコラボレーション手法によって、文化プログラムのセンター機能を果たしたいと思っています。そのためには、協会の各種文化事業や日本万博記念基金事業、ASK(アーツサポート関西)などが有機的に関連し、総合力を発揮することが重要です。佐々木さんは、具体的にどのようなアイデアがありますか。

**佐々木** 例えば2017年に開催される「食博覧会・大阪」の活用が考えられます。これは4年ごとに開催されるいわば「食のオリンピック」で、関西・大阪21世紀協会は1985年の第1回から主催団体の一員として協力してきました。前回は2013年に開催され、11日間で65万人以上が来場し、12億円の事業規模でした。私は、これをカルチュラルオリンピックの一連の流れと関連させることができると思います。食博こそは、関西の和食を世界に発信するチャンスです。食と音楽や関西の伝統芸能などをコラボレートして発信することもできるでしょう。こうした文化プログラムは、2015年5月ぐらいまでに自治体から政府に案を出せば、国の助成金を受けられる可能性があります。今、こうした複合的な戦略を立てて実行すべき時期にあるのです。

**堀井** 大阪へのインバウンドが増えれば、おのずとその地域の文化度が問われます。その意味でも、伝統文化だけではなく、西洋音楽であるオペラやクラシックも皆で楽しめる文化環境でないと魅力的なまちとはいえないでしょう。水上オペラはそのための社会実験でしたが、内藤さんは、もっと多くの方々にオペラを楽しんでいただくために、どのような手法があると思われますか。

## 食と音楽

**内藤** 親子で楽しめるように「ヘンゼルとグレーテル」などのよく知られた物語を日本語でやる場合があります。また、ストーリーをご存知ない方のために日本語字幕を付けてもいいですね。そうすることで、少しでも多くの方に馴染んでいただけるのではないかと思います。

**松本** 音楽と食はとても密接しているものだと思います。ヨーロッパではコンサートを聴いた後で食事に繰り出し、美味しいものを食べながら美味しいお酒を飲みながら、今日聴いた演奏の話に花を咲かせます。そんな楽しみ方もあることを知ってほしいですね。しかしこんなことをいうと、またクラシックはハードルが高いと思われるかもしれませんが、ヨーロッパの劇場には立ち見席など、若い人が気軽に足を運べるような安い席があります。是非日本の劇場もそうした取り組みをしてほしいと願っています。

**當麻** 昨年、アーツサポート関西で「京阪神ビルディング文楽支援寄金」が創設され、国立文楽劇場で関西の大学生や専門学校生などがワンコイン(500円)で文楽を楽しめる機会を作りました。開演前には文楽技芸員の解説もあり、伝統芸能をより身近に楽しんでもらう工夫も好評でした。

**堀井** 観客を増やすには、安い料金で芸術・文化を楽しむ仕組みを充実させることも大事ですね。

**當麻** おっしゃる通りですが、興行主としては赤字が怖いですから、席が十分に埋まらない公演の入場料を安く設定しにくい事情があります。そこで、例えば夏休みや大阪城フェスティバル期間中などに限定して安い席を作ったり、周辺のレストランなどと連携して食事券付きのチケットを作るなどの工夫をすれば、より多くの方々にご来場いただきやすいのではないのでしょうか。大阪の多彩な食文化も発信できます。

**堀井** 大阪には、そうした文化的ポテンシャルがいくらでもある。今後も芸術・文化の楽しみを社会に広げ、浸透させ、まちの活性化につなげていきたいと思っています。ありがとうございました。

(2015年2月2日・追手門学院 大阪城スクエアにて)

### 松本薫平氏(オペラ歌手)

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。高橋大海、フィオレンツァ、コッソット、イーヴォ・ヴイング、エディット・マルテッリ、ダンテ・マーツォーラの各氏に師事。1999年関西二期会35周年記念オペラ「ラ・ボエーム」のロドルフォでデビュー後、オペラ作品に多数出演。平成20年度咲くやこの花賞、第4回神戸キワニス文化賞など受賞。

### 内藤里美氏(オペラ歌手)

大阪音楽大学卒業、同大学院オペラ研究室修了。ウィーン国立音楽大学音楽セミナーマスタークラスディプロマ取得、プラハ国際ヴォーカルマスタークラスディプロマ取得。2006年11月よりドイツ・エアフルト歌劇場とゲスト契約。NHK名曲リサイタル、クラシック倶楽部などの出演をはじめ、国内外のオペラ作品に多数出演。